

ゆみとても蒼いから」

ゆみ ええ、

...

高橋、上手から登場。

3・1・1

ゆみ
嘉子
白井

信二 ああ、

高橋 あの、すいません。

信二 え？

高橋 ちょっと、

信二 ああ...でも。

高橋 すいません。

信二 うん。

高橋 (他の人に) すいません。

信二 すぐ、戻ってきますから。

嘉子 はい。

信二、高橋、上手に退場。

3・1・2

4

ゆみ なんだからあー、

嘉子 まあ、いろいろあるわよ、長く生きてると。

ゆみ うん。

...

ゆみ でも、おじいちゃんが調布のおじさんの店手伝ってたなんて、知らなかったよ。手伝ってたってほどじゃないけどね。

白井 先生は、戦前から、こちらに住んでらっしゃったんですか？

嘉子 そうよ。

白井 私、それも知りませんでした。

嘉子 この部屋から台所の方はね、戦前のまま残ってんの。

白井 ああ、それで。

嘉子 あと、こっち側は、全部、あとから建て増したんだけど。

白井 ああ、そうなんですか。

嘉子 ニュータウンができるまではね、もう、本当に田舎だったから。

白井 ええ、それは、習いました、学校で。

嘉子 ああ、そうか。

白井 はい。

嘉子 白井さん、いくつの時、越してきたんだっけ、こっちに？

白井 えっと、小学校の二年ですね。

嘉子 あ、そう。

白井 うちは、ニュータウンの第一期ですから。

嘉子 そうか。そうだったね。

白井 東京のね、大田区の方から引っ越してきたんだけどね、それが、まだ私鉄も何にも通ってなくて、

ゆみ ああ、

白井 桜ヶ丘までバスで行ってたんだよ、その頃は、

ゆみ ああ、それは何か、聞きました。お父さんか誰かから。

嘉子 だって、そんなこと言ったって、もともとね、こんなところから東京にお勤めに出るなんて、思ってもいなかったんだから、昔は。

白井 でも、それにしても、不便でしたよ、子供心に。

嘉子 だから、それは、あなた、東京の方から引っ越してきたからでしょう。

白井 ええ、まあ、それは…

嘉子 ねえ、ゆみちゃん、お茶いれてきてくれない。熱いやつ。

ゆみ ああ、はい。

白井 あ、じゃ、私が、

嘉子 まあ、白井さんは、もう休んで。

白井 え、でも、

ゆみ 私、いれてきますよ。

嘉子 ありがとう。

ゆみ うん。

ゆみ、上手に退場。

嘉子、ゆっくりとアルバムを引き寄せてめくりながら。

3・1・3

……

嘉子 今日は、お父さんのとこ泊まるの？

白井 ……いえ、

嘉子 まだ、だめ？

白井 いえ、もう、さすがに、そんなことはないんですけど。

...

嘉子 (アルバムを見ながら) ああ、ここ、覚えてる、北軽井沢の自然の家。

白井 ああ、ええ。

嘉子 これ、たぶん、最初の年よ、生徒連れてった。

白井 え、あそこって、そんな前からあったんですか。

嘉子 そうそう。その前までは、臨海学校だったんだけどね、海は、事故が多いでしょう。それで、こっちになったのね、夏の、林間学校。

白井 私、覚えてますよ、先生と一緒にテレビ見たでしょう、

嘉子 え、なに、それ？

白井 ほら、ダイアナとチャールズの結婚式の。

嘉子 そうだったけ？

白井 そうですよ。

嘉子 ああ、何か、見たような気がする、生徒たちと。

白井 すごい、もう、聡美とか、泣き出しちゃって。

嘉子 え、どうして？

白井 わかんないですけど、中学生くらいの女の子って、泣くじゃないですか、そういうことで、

嘉子 ...ああ、そうか、思い出した、スイカ食べながら見たのよね。

白井 ええ、

嘉子 私たちの部屋にみんな押し掛けてきて。

白井 だって、先生たちの部屋しかテレビないんだもん。

嘉子 うん。

白井 それで、最初、串本先生にダメだって言われたんですよ。

嘉子 うん、うん。

白井 でも、中沢先生が、いいって言ってくれて。

嘉子 そうだったっけ、

白井 はい。

嘉子 そうか...、何年、十五年、あれから？

白井 十、六年ですね。中二の夏休みだから、林間学校。

嘉子 よく覚えてるのね。

白井 ええ、だって、それは。

嘉子 ねえ、あんなに仲良かったのにねえ...あの二人

白井 ええ……
嘉子 歳とるはずよねえ……みんな……、

篠崎、上手から登場。
3・1・4

篠崎 皆さんは、まだ、奥で？
嘉子 はい。
篠崎 そうですか。
嘉子 すいません、なんだか、
篠崎 いえいえ、とんでもない。

……
嘉子 教え子なんです。
篠崎 ええ、ええ、さっき、伺いました。
嘉子 あ、そうですか。
篠崎 はい。
嘉子 何だか、儲かってるんですって、最近、葬儀屋さんって？

篠崎 いえ、そんなことはないですよ。
嘉子 だって、ニュータウンもねえ、年寄りばかりになってきたでしょう。
篠崎 ああ、ええ、それは、まあ、
嘉子 三十年も経つとねえ。
篠崎 できた当時はねえ、若いご夫婦ばかりでしたけどね。
嘉子 そりゃ、そうよ。
篠崎 はい。
嘉子 うちの、私のいた四中なんて、来年から二クラスになりそうなんだって、
篠崎 はあ、
嘉子 もうね、ちょうど、私の辞める頃なんかはね、もっと学校作れて言うてたくらいなのに。
篠崎 そうですか、
嘉子 まだ、二十年も経ってないのよ。
篠崎 ええ、
……
篠崎 まあ、お年寄りには、ちょっと不便なようですね、階段とか多くて、ニュータウンは。